

## より良い消費社会を実現するためには？ —社会心理学の可能性の検討—

企画者： 日本社会心理学会第63回大会準備委員会

司会者： 永野 光朗 (京都橋大学)

話題提供者： 杉本 徹雄 (上智大学)

竹村 和久 (早稲田大学)

秋山 学 (神戸女子大学)

指定討論者： 山口 裕幸 (九州大学)

### 概要

現代の社会に生きるわれわれ人間にとって消費（商品やサービスを購入、使用する過程）は欠かすことができない重要な課題である。一方で商品やサービスを消費者に適切に供給する企業活動は多くの人々の業（なりわい）であることも自明である。

このような「消費者利益」と「企業利益」が相反することなく、両者が有形・無形のものを含めた利益を得ることが社会全体の向上につながることは言うまでもないが、消費の多様や情報伝達手段の進歩により、企業による過剰な利益確保（詐欺的商法など）が消費者の利益を損ない、また消費者による過剰なクレームが結果的に自身の損益につながるという事例が多く生じている。

このような問題の解決のためには人間である消費者の心理・行動特性を客観的に理解することが必要であると考えられる。社会心理学は環境問題、交通問題、医療問題など様々な社会問題の解決のために多大な貢献をしているが、本シンポジウムでは、ミクロな単位としての人間の行動を十全に理解することで「消費」に関する問題を解決し、マクロな社会全体の幸福・安寧をどのように確立していくことが可能であるのか？を「社会心理学の可能性」をキーワードとして検討する。

個人の利益、企業の利益を統合した視点での消費者行動研究の展開は、社会全体の利益を高め、結果的に個々人のウェルビーイングを高め、SDGsの実現を達成することで社会全体のレベルを高め、存続につながると確信している。その実現のために社会心理学がどのように貢献できるかを探っていく。

## ウクライナ復興支援を日本の復興研究から考える

### －ウクライナ人を助けたい気持ちはウクライナが復興するまで続くか－

企画者： 小林 智之 (福島県立医科大学)・石山 裕菜 (京都橘大学)

司会者： 石山 裕菜 (京都橘大学)

話題提供者： 小林 智之 (福島県立医科大学)

川崎 一平 (京都橘大学)

江 子正 (京都大学大学院法学研究科)

小國 龍治 (立命館大学)

指定討論者： 川上 正浩 (大阪樟蔭女子大学)

#### 概要

ウクライナ国内で過酷な戦争状態が続く中、多くの人々がウクライナに共感し、援助の手を差し伸べようとしている。戦争終結後、破壊された都市にウクライナの人々が戻れるように復興について考えていく必要がある。2022年3月22日にウクライナのゼレンスキー大統領が国会で暗に言及したように、日本は東日本大震災や福島第一原発事故からの復興を続けている。本ワークショップでは、日本国内の復興研究や対人援助研究の知見からウクライナの復興支援について考える。

福島第一原発事故においては、発生当時は「がんばろう日本!」のような被災者支援の風潮が全国的に見られたものの、原発避難が長期化するうち、被災者に対する差別や無関心さが見られていった。その背景には、被災者を受け入れることによる社会的資源の分配による不満や、事故の被害に共感できるような刺激の不足などの心理的な要因がある。インフラやコミュニティが破壊されたウクライナにおいても、その復興に多くの年月を要することが予測され、同様の問題がウクライナ国内外で発生することが懸念される。

本ワークショップでは、避難者の集団間葛藤、対人援助、国連憲章体制下の安全保障、モラルの専門家が話題提供者となり、オーディエンスと共に多角的な視点からウクライナの復興支援を考える。なお、本ワークショップは、メンチメーター (<https://www.mentimeter.com/>) というソフトウェアを用い、話題提供者から提案された課題について参加者とインタラクティブに意見交換を行いながら進行することを予定している。

## 社会心理学における構成概念の測定再考 —理論と測定モデルの接合—

企画者： 清水 裕士 (関西学院大学)

話題提供者： 水野 景子 (関西学院大学)

柏原 宗一郎 (関西学院大学)

清水 裕士 (関西学院大学)

指定討論者： 石黒 格 (立教大学)

### 概要

社会心理学では、態度、志向性、パーソナリティなど、さまざまな構成概念の測定が行われている。しかし、現状の社会心理学における測定は、それらの構成概念についての理論的な定義と、測定方法の対応が必ずしも明確になっているわけではない。たとえば態度測定やパーソナリティ測定において無批判にリッカート尺度が利用されてしまっている。一方で、社会心理学で使われる様々な心理的構成概念は他の社会科学、たとえば行動経済学や計量政治学、計量社会学といった学問分野に輸出されており、一層社会心理学者の「測定に対する理解」が求められているといえる。

本ワークショップでは、社会心理学における概念の理論的定義と測定方法の接合を試み、「何が測定されているのか」について説明可能な心理測定の枠組みを提案する。具体的には、まずは清水が社会心理学における概念の測定と、社会科学における役割について論じる。続いて水野氏が社会的価値志向性について、社会選好のモデルとの相同性を比較しながら、測定モデルと新しい測定課題を提案する。そして、柏原氏は潜在連合テストを用いた潜在的態度および自尊心の測定について、認知心理学のモデルに基づいた新しいモデルと、理論的に妥当な測定課題を探索した研究例を紹介する。最後に清水が、社会心理学で中心的な役割を演じてきた「社会的態度」についての理論的整理を行い、それを測定するための新しいモデルを提案した研究をお話する。

指定討論では、社会心理学と数理・計量社会学の両分野で活躍されている石黒格氏に、社会心理学における心理測定が、これからどのように社会科学で貢献しうるかなどについて議論をしていただく。

## 『民主主義の実験』を巡る社会心理学への期待

企画者： 大沼 進 (北海道大学)

話題提供者： 中澤 高師 (東洋大学)

辰巳 智行 (豊橋創造大学)

白松 俊 (名古屋工業大学)

指定討論者： 有馬 淑子 (京都先端科学大学)

### 概要

“民主主義”は一つの理念であり伝統的には規範の学問で扱われてきた。しかし、理念を唱えるだけでは現実問題への対処には不十分である。建設的な話し合いが成立する討議の場づくりの要件は何か、それらを妨げる要因は何か、そして、どうすればその仕組みが現実の社会に実装可能なのか、などについて、実証的な知見の積み重ねが求められる。

本企画では、各方面で試みが始まっている“民主主義の実験”について、社会心理学外の学問領域における取り組みを紹介していただき、それを通じて社会心理学がすべきこと、期待されることをフロアのみなさまとディスカッションしたい。“民主主義の実験”の射程は単なる事実や現象の羅列を越えた問題解決の道筋を探ることも含む。これはLewinのスピリッツとも整合的なはずである。

最初に、企画者から“民主主義”の範囲や、社会科学における近年の取り組みを紹介する。続いて、一人目の話題提供者(中澤・辰巳)から、社会学や政治学で広まっている討議デモクラシーについて、既存研究の問題点と、それを克服するための討議の質を評価する指標について紹介し、実際に行われた事例から討議の質を評価した研究を発表する。二人目の話題提供者(白松)は人工知能(AI)研究の観点から、反復的な試行錯誤を伴う合意形成プロセスを仮定した議論支援手法や、意見の対立を越えた上位の解決案を導く「止揚」を促進する議論支援手法の実験的試行を紹介する。また、参加型民主主義プラットフォームの実践的な取り組みも紹介する。以上を受け、指定討論者(有馬)は、両発表内容が社会心理学における知見に照らし合わせてどのように接続可能なのかについて講評する。

## マインドセット研究のこれからを考える：「社会的動物」からのパースペクティブ

企画者： 竹橋 洋毅 (奈良女子大学)・尾崎 由佳 (東洋大学)

話題提供者： 岩本 慧悟 (東洋大学)

尾崎 由佳 (東洋大学)

鈴木 啓太 (立命館大学)

指定討論者： 沼崎 誠 (東京都立大学)

### 概要

人々は、特性や世界のありようについての個人的な信念をもつ。これは、マインドセットあるいは暗黙理論と呼ばれ、個人の目標追求や精神健康などに影響を及ぼすという知見が蓄積している (e.g., Dweck & Yeager, 2018; Walton & Crum, 2020)。現実で直面する状況はあまりに複雑で、情報量が多すぎるため、人は情報を単純化し、理解を容易にするための心的メカニズムをもち、マインドセットはその一つであると考えられている (Crum, Salovey, & Achor, 2013)。マインドセットは直面する状況の解釈のしかたに関わる要因であり、予言の自己成就的に状況への反応に影響を及ぼす (Walton & Crum, 2020)。

マインドセット研究は人が「変わることができる」という素晴らしい側面を描き出すが、人は生物学的・遺伝的な制約も受けている。また、進化心理学的な視点からすると、我々の好み、思考、能力の多くを形成する究極因は他者への影響である (Hippel, Hippel, & Suddendorf, 2021)。そのような「社会的動物であるという人の性」をよく理解し、それに合わせた形で行動変容を促すことは、社会心理学の知見の現実場面への応用を考えていく上では重要であろう (Forgas, 2020)。実際、マインドセット介入は学力改善への効果が限定的であるというメタ分析 (Sisk, Burgoyne, Sun, Butler, & Macnamara, 2018) が報告されているが、近年ではマインドセット介入が周りの人々 (例：教師) から是認される場合には有効であるが、そうでない場合には効果がみられないという知見も報告され始めている (Reeves, Henderson, Cohen, Steingut, Hirschi, & Yeager, 2021)。マインドセット研究では孤独な目標追求という視点に焦点をあてるものが大半だったが、対人的な視点を導入することでマインドセット効果をより深く理解できる可能性がある。

そのファーストステップとして、本ワークショップでは「人と関わる×マインドセット」をキーワードとした研究知見を共有し、マインドセット研究の未来について議論したいと考えている。まず、岩本氏はストレスや能力のマインドセットが他者 (例えば、部下や採用候補者) に対する推測や評価に与える影響に関する研究を紹介し、主に産業・組織場面での「他者との関わり」においてマインドセットに着目する意義や課題について議論する。次に、尾崎氏は「ストレスは溜まるもの」という捉え方 (ストレス蓄積マインドセット) に注目し、そうした信念が少なくとも一部の人々に共有されていることや、その帰結としてもたらされる悪影響、そしてマインドセット介入による改善の可能性について議論する。そして、鈴木氏は『人と関わる』を少し広範囲に捉え、教育制度とマインドセットの関連性について議論する。最後に、沼崎氏から指定討論を頂いた上で、フロアからご意見を頂き、マインドセット研究について皆で一緒に考えることができれば幸いである。

**学際的な社会心理学の構築を目指して —若手研究者のための教育講演—**

企画者： 高岸 治人 (玉川大学)・山田 順子 (立正大学)

司会者： 山田 順子 (立正大学)

話題提供者： 阿部 匡樹 (北海道大学・非会員)

石原 暢 (神戸大学・非会員)

永澤 美保 (麻布大学・非会員)

西谷 正太 (福井大学・非会員)

**概要**

ヒトの社会性に関する研究はここ10年で急激に学際化の一途をたどっている。質問紙や行動実験のみでは捉えられないヒトの社会性の本性を解き明かすために、脳画像解析、ホルモン解析、遺伝子解析における最先端の解析技術を総動員した研究が展開されている。今後、社会心理学分野においてこの傾向はますます高まっていくことが予想されるが、それに伴い将来の社会心理学業界を担う若手研究者に要求される知識量も飛躍的に増えていくと考えられる。そのような状況の中、社会心理学を志す若手研究者が参加する学会にてヒトの社会性を扱う学際的な研究発表を聞く場を設けることは若手育成の観点からも意義が高いと考える。そこで本ワークショップでは、認知神経科学、健康・スポーツ科学、行動内分泌学、生命情報学を専門とする研究者によるヒトの社会性における最先端の研究成果の発表を教育講演として実施する。

阿部先生には、ヒトの協力行動に関わる脳機能について2台のfMRIによる同時計測(ハイパースキャン)についての研究をご報告いただく。石原先生には、体組成、体力などの健康関連指標と向社会性の関係についての研究をご報告してもらおう。永澤先生には、ヒトとイヌの間の社会的絆の形成に関するオキシトシンの役割についての研究をご報告してもらおう。西谷先生には、被虐待経験が子どもの脳発達やDNAメチル化に与える影響、および老化の指標としてのDNAメチル化年齢の活用についての研究をご報告してもらおう。

本ワークショップは教育講演のため通常の指定討論者は設けず、研究発表の時間を長めにとる。また研究発表後にフロアによる質疑を実施する。